

シリーズ 『明日の神話』を知ろう！

連載4回目 甦る「ダンス」

《明日の神話》《太陽の塔》など、岡本太郎がパブリック空間への作品を制作し始めるのは、今から半世紀以上前の1950年代です。芸術作品を一部のインテリアや金持ちの専有物にしてはならないと主張する岡本は、人々の生活の身近にあってより多くの人々に感動を与えることのできる手段として、いつでも、誰でも、タダで見ることのできるパブリック空間への作品制作を展開させていきました。

岡本が最初に手掛けた作品は、1952年に東京・日本橋の高島屋デパートの地下道に制作したモザイク壁画《創生》です。この作品を起点に、大和証券ビルや松竹会館、丹下健三の設計した旧東京都庁の壁画が誕生しています。残念なことに、初期の壁画のほとんどは施設の老朽化とともに壊されてしまい、その姿を見ることはできませんでした。

ところが、昨年、大阪の高島屋が所蔵していたモザイク画《ダンス》が、岡本太郎生誕100周年を機に長い眠りから覚め、修復を経てこの3月に一般公開されることになったのです。これは《創生》の直後に制作された、岡本のモザイク作品としては初期のものです。1952年の第1回日本国際美術展で発表され、同年10月に高島屋大阪店で開催された「渡欧記念岡本太郎展」にも出品しています。岡本はこの作品をアメリカでの個展に出品するつもりでしたが、その大きさと重量のため運搬することができず、渡欧記念展の後に高島屋大阪店の1階大食堂に飾られることになったのです。しかし、その大食堂も1969年で閉店しており、壁画は高島屋東別館の高島屋資料室に運ばれて今日まで大切に保存されています。

今回、愛知県常滑市にある株式会社INAX(制作当時社名:伊奈製陶)で行われた修復では、岡本のモザイクに対する色へのこだわりや、タイルをつなぐ目地にくらされた工夫など、制作にかかわる新たな発見がなされています。詳しくはINAXのホームページでも紹介されていますので割愛しますが、ここからも作品に対する岡本の情熱をうかがうことができます。

《明日の神話》に続いて《ダンス》の再生は、岡本太郎作品を保全継承する私たちの背中を後押ししてくれるものです。噂によると愛知県犬山市の日本モンキーパークに作られた《若い太陽の塔》も再生されるとい話も出ていたとか。今後さらなる作品の発見や再生を期待しつつ、岡本太郎が全身全霊で作上げた作品を未来につなげるための活動がより多くの人々のムーブメントとなって進められることを願っています。

(元川崎市岡本太郎美術館・学芸員/大杉浩司)



修復された岡本太郎のモザイク作品「ダンス」

名称：ダンス
制作年：1952年
サイズ：縦2,352m 横3,488m
材質：モザイクタイル(タイルピースサイズ:10mm×10mm、タイル色数・使用数 38色 約57,400 ピース)
所在名所：大阪高島屋7階レストランフロア
所在地：大阪府中央区難波5丁目1番5号

Topics トピックス

岡本太郎生誕100周年で報道ラッシュ、『明日の神話』の注目度がさらに高まる



『明日の神話』を大きく紹介した北海道新聞

『明日の神話』を大きく紹介した北海道新聞・日曜版、2月22日発行の朝日新聞・マリオン、2月27日放映のテレビ朝日で『明日の神話』を修復にあたった吉村絵美留先生にスポットを当てた番組「修復の技術」、3月6日発行のOKAMOTO'Sを取り上げた集英社「すばる」、3月10日発行のカーサ・ブルーナス、4月3日放映のNHKの番組「太郎と敏子」等々。中でも北海道新聞では当NPO活動の取り組みにもスポットを当て

機会に、1月から3月にかけて多くのマスコミ関係に『明日の神話』を取り上げていただき、当NPO法人は撮影・取材に協力しました。当NPO法人にとっては、これまで以上に『明日の神話』を多くの方に知っていただく機会が増えたことを、うれしく思っています。主なものは、元旦の日本経済新聞の文化芸術欄、2月20日発行の北海道新聞・日曜版、2月22日発

ていただき、当NPO法人・小林幹育理事長のインタビューを交えて、壁画の清掃活動「すす払い」の取り組みの裏話、『明日の神話』を7分割した名刺大の会員証についても紹介していただきました。当NPO法人は、『明日の神話』を広く知っていただくPR活動にも力を入れています。



7枚で『明日の神話』の絵が完成する「会員証」

TARO 語録

心のなかに生きている。
その心のなかの岡本太郎と
出会いたいときに出会えばいい。



岡本太郎 (『強く生きる言葉』イーストプレス)